抄　　録

鼓膜所見を缺く乳樣突起炎

久保正雄

耳鼻咽喉科臨床 37 卷 12 號 1007（昭和 17 年 12 月）

Ⅰ．6歳男兒，主訴，右側耳後腫脹，5日前より微熱，輕度の耳痛あり，今朝より右耳翼聳立起り壓痛あるも鼓膜に殆ど變化なく只々僅かに肥厚せる如し。Schwartze 氏手術施行，蜂窠發育は中等度にてS字狀竇周圍蜂窠の壞疽性變化最强く一部骨壁缺損を來し靜脈壁發赤稍々肥厚を示せり。乳樣洞内には膿汁あり肉芽發生强く特に洞入口部に著明にて，膿汁中より Gram（一）双球菌及葡菌を證明せり，術後經過順調鼓膜切開創も5日目乾燥治癒せり。

Ⅱ．生後 40 日目の男兒，主訴，左側耳後部腫脹，生後3日目より吐乳あり，數日前より主訴に氣付き漸次增大，微熱，不機嫌あり。左側耳翼聳立し耳後部に扁桃大腫脹ありて波動を證明するも鼓膜は全く異常なし，只外聽道入口後壁稍々腫脹す。試驗的に切開するに骨膜下膿瘍を證明し，骨瘻孔形成され，小指頭大の乳樣洞内は膿汁並に肉芽に充塡され，特に洞入口部に强し。膿汁中より溶連菌證明。術後體溫下降し吐乳も減少せり。即ち以上2症例は，星野，西端兩教授の說の如く中耳炎の際は鼓室も蜂窠も共に同時に犯され，之が乳樣洞入口部の狹きと肉芽發生とに依り兩者が隔絕され，鼓室は一見治癒せる形を呈せるものと思考さる。小兒の場合は特に中耳炎の初期より全骨胞に汎發する傾向强く，且小兒中耳炎に肉芽發生の傾向大なる事は夫々レ線像及び鼓膜の乳樣穿孔を來し易き點より察せらるる事にして兩者相俟つて本症例の如き形態をとるものと思惟す。且乳嘴突起發育途上のものに於ては早期に外部に破れ易く耳後腫脹，骨膜下膿瘍を形成し易き點も本症發生に大なる關係あり。（窪抄）

喉頭截開術に依り摘出せし小兒喉頭乳嘴腫の1例

岡本榮之助（京府大耳鼻）

耳鼻咽喉科臨床 37 卷 10 號 908（昭和 17 年 10 月）

6歳の女兒，主訴，音聲嗄嗄及び呼吸困難。約2年前より嗄聲に氣付き，3ヶ月後初診，眞聲帶前連合部より發生せりと思はるゝ定型的乳嘴腫像を呈せるを以て Radium 療法 52 回，2600mg 時照射を行ひたるも無効，放置せるに近來殆ど無聲，夜間呼吸困難を來せり。呼吸困難の爲喉頭所見不明なるも殆ど窒息狀態となれるを以て下氣管切開施行，直達鏡下に乳嘴所見を認めたり。12 日目全麻下に喉頭截開術施行，甲狀軟骨を正中線にて縱切開し聲門下腔を見るに蒼白桑實狀豌豆大の定的乳嘴狀腫瘍數個集りて殆ど閉鎖せられ聲帶を明現し得ず。鋭匙鉗子にて可及的完全に摘出せり。腫瘍は前連合部にて廣基底を以て發生し，一部上方は Morgani 氏竇より假聲帶に迄達せり。出血及術後の不快合併症もなく7日目氣管套管拔去，21 日目手術創全治せり。再發豫防の目的にてレ線療法を行ひたるに約半年にて發音正常となり，滿1年經過せる今日未だ再發の徵なし。組織學的には乳嘴狀增殖極めて旺盛にて角化傾向著明なる乳嘴腫にして惡性變化を認めざりき。（窪抄）

Salmonella 菌症と耳鼻咽喉科

荒井　章（滿大）

大阪醫事新誌 13 卷 11 號 1123（昭和 17 年 11 月）

Salmonella 菌屬殊に C-Grüppe により起るものを Paratyphùs C 症と呼ぶ。滿洲の Paratyphùs C 症は色々の病型を呈するも耳鼻咽喉科領域に於ては，高度の貧血を伴ふもの，急性扁桃腺炎，急性口峽炎の型をとるもの關係深し。C-Gràppe の Salmonella 菌屬の中 S. Cholerae sùis var Kunzendorf の感染最も多し，著者は咽頭扁桃腺炎と診斷する以外熱原を見出し得ざる 13 歳男，16 歳女，13 歳女の3症例が Paratypùs C 症なりしを經驗し，又 27 歳男の嚥下痛，全身倦怠感を主訴とせる症例に於て局所々見に比し全身症狀强き爲血液培養を行ふに Salmonella 菌屬 B-Grùppe の S. essen を證明せり。21 歳男子の鼻出血，發熱を主訴とせる再生不良性貧血症の患者に於て S. thompson 類似菌を證明せり，その他嗄聲を主訴とせるものにて又中耳分泌中より Salmonella 菌屬を發見せる報告あり。上記の如く Salmonella 菌屬も耳鼻咽喉科領域に於て第一次的に或は二次的の意味を有す。現今交通頻繁なる本邦に於ても大陸の疾患には更に一段の關心を持つ必要あり。（財前抄）